

---

# 小説家の沼川海湖です

雪鈴るな

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

小説家の沼川海湖です

### 【Nコード】

N5801E

### 【作者名】

雪鈴るな

### 【あらすじ】

【七夕小説企画『星に願いを』】織姫は彦星を求め。彦星もまた織姫を求め。現代の織姫と彦星は何を求めて何を望んでいたのでしょうか。推理小説「私が愛した彦星」編の始まりです。

## 第1話 織姫と彦星1

事件は突然訪れる。

早朝の出勤のために先を急いでいた車が運転を誤って車道をはずれて田んぼに突っ込む。

車は車体を揺らしながら田んぼに浮いて、その後車体は静かに沈みドロの中にタイヤを落ち着けてゆく。

当然運転手は、まさか自分が事故を起こすなんて思ってもみなかっただろう。革靴で田んぼの中を歩く運命である事さえも。

東京都新宿にいる35歳の真鍋幸彦も、まさか自分が一人だった。

まだそういう運命である事を知らない真鍋は幸せの絶頂期にいた。その理由は、愛しい相手と出会えるからである。

7月1日。午後2時。新宿駅前は今日も晴れていた。

日陰にいても蒸し暑く汗が滴り落ちてくるが、ショーウィンドーに並んでいる七夕の飾りが夏風に揺れて、それを目に留める通行人にせめてものと涼しげな風情を伝えている。

真鍋は左手首にある腕時計を見ながら彼女を待ち続ける。

彼女との待ち合わせ時刻は2時なのだが、少々遅れても全く気にならない。

彼女は必ずやって来るという自信があるからだ。

真鍋が着ているのは新調したばかりのスーツ。彼女はこのスーツを気に入ってくれるだろうか。

「俺との結婚を考えてほしい」と言ったら、彼女はどんな顔をするのだろうか。

真鍋は、彼女の事を思っただけで興奮してしまう自分を落ち着かせるために、口から息を吐いて深呼吸をした。

午後の新宿駅前の人通りは多い。人ごみから目的の人物を探すのは容易な事ではない。

彼女から見ても、新宿駅前にいる真鍋を見つけるのは難しいはずなのだが、彼女は約30メートル離れた場所から真鍋を見つめていた。

会社員が多く行き交う新宿駅前で、7月になった今も長袖姿で歩く人は多い。

彼女もこの蒸し暑い時期に長袖姿で歩く一人だった。

道に行く人ごみが束となって真鍋の姿を隠しても、彼女の目はずっとその先にいる真鍋を見続けていた。

彼女は一直線に歩き真鍋に近づく。

真鍋が彼女に気づき笑顔になった時、彼女も笑顔になった。

真鍋と彼女は言葉を交わさずに肩を並べて歩いて行き路地へ入って行く。

そして路地の途中で立ち止まり、真鍋は口を開いた。

「君が俺を誘うなんて思ってもみなかったよ。待ち合わせ場所も1年前と同じ新宿駅前」

真鍋は懐かしそうな表情をして話す。

彼女も真鍋に好意があるようで、真鍋の顔や髪型、服装といった真鍋の全てを見つめながら話す。

「先週会ったばかりなのに」

「でも、去年別れたこの場所で会うのはイヤだって言って、君はここで待ち合わせるのをイヤがっていたじゃないか。俺もここで君にフラれるからこの場所で会うのは結構辛いんだぞ」

真鍋は視線を下げて過去を思い出す。

彼女はそんな真鍋をずっと見つめている。

「あなたをフツたんじゃないわ。都合で会えなくなるって言っただけよ」

真鍋は顔をあげる。

「確かにそうだが、俺にしてみればフラれたも同然だよ。あの時の俺はフラれた悲しみを忘れるために、どれほど酒を飲んだ事か」

真鍋の彼女を見つめる瞳は真剣だ。

小説家の沼川海湖です

彼女も真鍋の行動の「つ」をずっと見続けていた。

## 第2話 織姫と彦星2

通行人は路地で話す二人を気にも留めず通り過ぎて行く。通行人にとつては、真鍋と彼女はどうでもいい存在なのだ。ましてや、これから起こる出来事など予知できるはずもない。

彼女はその通行人の心理を知っているのだろうか。それとも迷いの無い彼女の思いが周囲の目を気にせず行動させてしまうのだろうか。

彼女は人目を気にする事なく真鍋に近づいて真鍋の胸に顔を埋めた。

「愛しているわ、幸彦。私のこの気持ちがあなたに伝わるといいんだけど」

真鍋は彼女を抱いて言う。

「君の気持ちは先週聞いたから、もう充分過ぎるほど知ってるよ。なぜ去年言ってくれなかったんだ。この一年、俺はどれほど君を恨んだ事か」

「分かってくれると思ったのよ。私と幸彦は似ているから」

彼女は幸彦の胸から顔をあげ幸彦をまた見つめる。

幸彦と彼女の顔はくっ付きそうなくらい近い。

彼女は幸彦の唇を見つめる。一年前、幸彦と一つになろうと思いを求めた幸彦の唇が目の前にある。

幸彦との体の相性はとてもよい。性格も似通っていて言葉を交わさなくても思いが通じる時がある。

今のこの瞬間も。

しかし、幸彦は彼女の心の根底にある思いだけは気付かずにいた。彼女は、幸彦の腕に抱かれながら昔と変わらない甘えた声で言う。

「幸彦、キスして」

綺麗に縁取られて赤く塗られた唇。彼女の唇がどれほど甘いか幸彦は当然の如く知っている。そんな彼女から誘われて男の本能をく

すぐられた幸彦は断れただろうか。幸彦は彼女に言われた通りに顔を近づける。

だが、もう少しで唇が重なり合うという時に幸彦の動きが止まり、彼女を抱いたまま顔を遠ざけた。

彼女の瞳は距離ができた幸彦の顔をじっと見ている。

幸彦も彼女を見つめながら言う。

「前もって言うておくけど、何があっても、俺の「結婚したい」という思いは変わらないよ」

「ええ。1年前の幸彦も私にそう言ったから分かっているつもり。

だから私はここに来たの」

彼女は幸彦に顔を近づける。

「幸彦、キスを」

「君という人は」

幸彦と彼女は唇を重ね合わせた。互いの思いを確かめ合うように、最初はモールス信号のように一定のリズムで唇と舌を触れ合わせ、途中からは互いの欲するままに相手の唇を貪り合っていく。

幸彦は、彼女の唇の甘さに酔いしれ、その刺激に興奮して彼女の体の温もりを求めて、首筋にもキスをしていく。

しばらくの間、彼女は瞳を閉じて幸彦が本能のままに身体にぶつけてくる快樂を感じていたが、キスの位置が徐々に下へ移動し鎖骨にキスをされた時に瞳が開いた。

その瞳にはなんの感情もなかった。口からは吐息がもれ、彼女の腕も手も指先も幸彦を求め、喜んで幸彦と腰を擦り合わせて幸彦の存在を全身で感じているのに、彼女の瞳だけは冷静に一点だけを見つめていた。

通行人は路地の陰で抱き合い情事を重ねている二人に見向きもせず通り過ぎて行く。

彼女の瞳は斜め上にある空を見つめていたが、幸彦が鎖骨にキスをしながら「近くのホテルへ行こう」と言った時、彼女は瞳を閉じた。閉じた瞳から涙が流れ落ちる。

その後、幸彦の愛撫を受けるだけだった彼女の行動が一転する。彼女は幸彦の背中にあつた両方の手を、幸彦に気付かれないようにゆっくりと動かして、右手を左の袖口に入れた。

袖の中にあるのは、あらかじめ用意してあつた果物ナイフ。薬局で購入した医療用の粘着テープで左腕の肌に直接固定してある。取り出しやすいように刃の部分を奥に、柄の部分を手前にしてある。

### 第3話 織姫と彦星3

彼女は果物ナイフの柄を掴むと、ナイフが固定してあったテープを引き千切り、左の袖口から果物ナイフを抜き取った。

幸彦は、まだ彼女の変化に気付かず瞳を閉じて彼女の唇や頬、首筋にキスをして愛撫を続けている。

「1時間だけでいい。ホテルへ。俺、もう我慢できないよ」

「私も。……もう我慢ができない。幸彦を愛し過ぎて」

「なら、今からホテルへ行こう」

幸彦がキスをやめて彼女から離れた瞬間、彼女は急いで幸彦の胸に飛び込んだ。

「どうしたんだ？ ホテルに行かないと　！」

本当の痛みと辛さは、物事が過ぎてから感じるものなんだと幸彦は今になって思い知る。

「な……ぜ……？」

幸彦は痛みと息苦しさを感じながらやっとの思いで声を出す。だが、その声は幸彦がどんなに頑張っても弱々しく口から出るだけである。

彼女は幸彦の腹に果物ナイフを突き刺していた。場所は鳩尾の軟らかい部分。そこから斜め上に向けて果物ナイフは刺さっていた。

彼女は飛び散る血を予想して、ポケットからタオルを出してナイフが刺さっている場所を押さえる。これで彼女自身は返り血を浴びる事はない。

幸彦は、すぐ後ろにあったビルの壁にもたれ背中を擦らせながら腰を下ろして地面に尻をつけた。

彼女も幸彦と一緒に腰を下ろしてしゃがむ。

通行人からは、二人が地面に腰を下ろして会話をしているようにしか見えず、相変わらず通行人は無関心に通り過ぎて行く。

幸彦の鳩尾に刺さっているナイフの場所から血がどんどん溢れ出

しタオルは瞬く間に真っ赤に染まる。

幸彦は、紫色に変わった唇を動かすがもう声は出ない。それでも彼女には幸彦が何を言っているのか分かるようで、幸彦と同じ目線で答える。

「愛しているから。だからなのよ」

彼女は別のポケットからもう一枚のタオルを取り出した。血で赤く染まったタオルの上に重ね、果物ナイフをゆっくりと抜く。その後すぐに同じ鳩尾に果物ナイフを突き刺した。更に奥深くに。

幸彦の瞳は見開いて彼女を見ている。そしてまた何かを言おうとして口を開けた時に、幸彦の瞳は光を失い、首は力を失い、頭は横に傾いた。

彼女は、死ぬ寸前の幸彦の声無き言葉にも返事をする。

「私も愛し過ぎてしまったの。本当に私たち似たもの同士よね」

幸彦の開かれた瞳は動かなくなったものの、通り過ぎて行く通行人を映し続けている。

彼女は流れ落ちた涙を右の袖で拭くと、タオルで押さえながらゆっくりと果物ナイフを抜き取った。

ナイフに付着している血を、幸彦の腹の上にあるタイルで丁寧に拭いて、左の袖口にナイフを入れる。その左腕に残っている粘着テープで果物ナイフを固定すると静かに立ち上がった。

赤くなつたタオルを腹に乗せて、壁にもたれて座っている幸彦は、路地の日陰でのんびりと休んでいるように見える。

彼女は、少量とはいえ手についた血を隠すためにポケットから取り出した黒い皮手袋を手装着する。もう一度幸彦を見て、喉の奥に流れる涙を飲み込んだ。

「さようなら、幸彦」

彼女は何事も無かつたように静かに歩き、路地を出て行った。

二人が路地にいた時間は20分弱。

その後、死んでいる幸彦を見つけたのは、運悪く路地を通ってしまつた若いカップルだった。

## 第4話 沼川海湖1

本名、野本美智子。25歳。ペンネーム沼川海湖ぬまかわつみこというプロの小説家である。

本職としている小説家業での収入が少ないため、普段アルバイトをしている彼女は、冷房の電気代を節約するために、アルバイトが終わると、近くのスターバックスコーヒー新宿新南口店でノートパソコンを開いてファンタジー小説を書くのが日課になっている。

髪型は左右に二つに結んだお下げ。理美容代を節約するために自分で切っている。

顔は近眼なのでメガネをかけている。最近流行の横細のレンズで、割引のセット価格になっていたものだ。

ジーパンに半袖のシャツを着ているが、冷房がきいた店内で小説を書いていると寒気を感じるためカバンの中には長袖の上着が入っていたりする。

スターバックスコーヒーの店内は美智子にとって心が落ち着くスペースなのだが、今の美智子はファンタジー小説の次のストーリー展開が思いつかず、一向に進まない創作作業に苛立ちを覚えてノートパソコンの液晶画面とずっと睨めっこをしていた。

結局どうする事もできず、美智子は背筋を伸ばしてため息を吐く。気分転換をしようと思いコーヒーカップに手を伸ばしてコーヒーを啜るが、コーヒーが口に入ってこない。

美智子がカップを覗くと、コーヒーは既に飲み干されて、空でございませと乾いたコーヒー染みのついた底が見えた。

財布の中を覗くが、もうコーヒーをお代わりする小銭は入っていない。

「はあー。あと一週間で締め切りなのに。原稿用紙50枚をどうやって埋めよう」

在りきたりの話ならいくらでも思いつくが、ファンタジーであり

がちな地水火風の四大元素の魔法を売りにして小説を書いても、編集担当からほかとネタが被って売れないと説教交じりの言葉をぶつけられ、書き直せと言われるのがオチだ。

そして一番怖いのは、締め切りを守らずなんの理由も無く原稿を落とす作家の運命。小説家としての信用を失えば次の仕事はもらえない。美智子はそれだけは重々承知しているつもりだ。

なんとかしなければならぬ。その思いだけが美智子の頭の中を駆け巡り、肝心のストーリー展開が思いつかない悪循環に陥っていた。

美智子は周りを気にしつつコーヒーを飲む振りをして、カップ内のコーヒーの香りだけを吸い込む。コーヒー代が無い貧乏作家の苦肉の策である。

美智子がコーヒークップを受け皿に戻した時、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

美智子は、誰かが交通違反をしたんだ、と思いつつノートパソコン画面を見ていたが、パトカーのサイレンはどんどん近づいて来て、サイレンを鳴らしているパトカーは、ついにスターバックスの店の前で停車した。

美智子は、スターバックスの店内から窓ガラスを通して外を見る。停車したパトカーの横面には四谷の文字がある。四谷警察署のパトカーのようだ。

そこから警察官が2名降りて、スターバックスコーヒー店のすぐ脇の路地へ入って行く。

「うっそおー。すぐそこじゃない」

美智子は急いでノートパソコンをたたみ、小脇に抱えて歩き出すが、バックを忘れたのを思い出して、座っていた席に戻ってカバンを肩にかけてから歩き出した。

店内にいた客も、仕事中の店員も、立ち上がったたり窓ガラスに張り付いたりしながら、何があったのか外の状態をうかがっている。

## 第5話 沼川海湖2

美智子は、何があったのか、もっと近くで見たいと思い店の外へ出た。

すると、またパトカーがサイレンを鳴らしてスターバックスコーヒーの店の前に停車する。

2台目に停車したパトカーは白のセダン。警官が乗る白黒のパトカーとは色が違う。助手席の屋根の上に赤提灯がありくるくると回っている。いわゆる覆面パトカーというやつだ。

その覆面パトカーからビジネススーツに身を包んだ中年のオヤジと若い男が降りた。

これはただ事ではないと思った美智子は、覆面パトカーから降りた二人の男のあとをついていく事にした。

肩を並べて歩く男の若い方が携帯電話を耳につけて何かを話している。

美智子は、さり気なく近づいて、その会話内容を聞くこととして耳をそばだてた。

「現場は、スターバックスコーヒー新宿新南口店の南にある路地を入った所です。はい。そうですね。分かりました。また終わり次第連絡します」

若い男は携帯電話を折りたたむとズボンの後ろポケットに入れて、中年の男と路地に入って行く。

美智子も二人に続いて路地に入った。しかし、路地にいた警官に行き先を遮られる。

「ここから中に入らないで。外に出て」

「あの、何かあったのですか？」

「ダメ。ダメ。早く外に出て」

美智子は、警官に肩を掴まれ半ば強引に回れ右をさせられて、来た道を逆に歩かされて路地の外へ押し出されてしまった。

警官は、すぐに美智子の目の前で封鎖のマークが入った黄色いテープを引いて、美智子の行く手を完全に遮断してしまう。

「ちよつとくらい教えてくれてもいいのに」

ビジネススーツの二人の男は、先にいた警官に胸から出した手帳を広げて見せている。二人の男は刑事のようだ。

「え！　うそ？　事件!？」

二人の刑事が立ち止まった所に、地面に尻をつけて座り壁にもたれている男が見える。

二人の刑事は白い手袋をして、地面に座っている男の服にある全てのポケットの中を調べて、財布などを取り出し中味を確認する。

無線機を腰につけた警官が二人の刑事の横に立ち、確認した内容を連絡した。

「発見された男は、脈は無く、心肺が停止していると思われま

所持していた免許証によると、害者の名前は真鍋幸彦。35歳。名刺によると　貿易の社員のようです」

心肺停止というのは死を意味する。それは美智子もよく知っているのだが、もつと凄いのには心肺停止状態の真鍋幸彦が美智子の知り合いと同じ名前であり年齢だという事だった。

「真鍋ちゃんって、あの真鍋ちゃんなの!？」

美智子の知り合いの真鍋ちゃんなのか。遠くから見ただけでは分からないが、美智子がちゃん付けで呼んでいるところを見ると、美智子は気づかずに心肺停止状態の彼を、知り合いの真鍋ちゃんだと決め付けているようだ。

## 第6話 沼川海湖3

警官は目ぼしい物を見つけると、その地面にチョーク線を書いて印をつけている。

刑事と警官が、死んでいる真鍋とその周囲を調べているうちに、今度はスターバックスコーヒー店の前に救急車が到着した。そのすぐ後ろに鑑識の車も到着する。もうスターバックスコーヒー店の前は、車が停車できるスペースは無いのだが、それでも更にあとから来たパトカーなど警察関係の車が到着し、取材関係の車も到着し、スターバックスコーヒー新宿新南口店は、様々な目的の客が増えて賑わいをみせていた。

野次馬は、スターバックスコーヒーのテイクアウトをしたアイスコーヒーを片手に、路地を行き交う警察関係者と取材関係者を見ている。

蒸し暑い中に立っている美智子は、冷たくておいしそうなアイスコーヒーを見て、飲みたくても飲めない思いを我慢し、生唾を飲み込んでから、担架に載せられて移動する真鍋を追いかけた。

美智子はノートパソコンを抱えて駆け足で救急車に近寄って担架に載せられた男の顔を見る。

目が開いている男の死に顔に恐怖し、美智子は救急車に背を向けるが、青白くなっていたあの顔は紛れもなく真鍋ちゃんだったと美智子自身も死の恐怖を体験して体を強張らせた。

「うそぉー。なんで真鍋ちゃんか……」

目を見開いた人の死に顔というのはああも気持ちの悪いものなのか。それは葬式で見る瞳を閉じた死に顔とは余りにも違ってしている。

美智子は寒気を覚え、それに加え胃が掴まれたような感じがして唾液すら飲み込むのが辛いほどに吐き気もして「今日はもう小説を書くのは無理だ」と呟き、家に帰ろうとした時に、左右から両腕を掴まれて、美智子は歩こうにも歩けなくなった。

美智子が左右を見ると、先ほど覆面パトカーから降りた二人の男が美智子の左右の腕を掴んで立っていた。

中年の男は、持っていた手帳を美智子に見せる。

「四谷署の刑事一課の箕浦です」

箕浦が見せた手帳にもそう印刷されている。

「箕浦次郎さん……」

箕浦は美智子の右腕を掴んでいた。

反対側で美智子の左腕を掴んでいる若い男も手帳を見せて言う。

「僕は同じ刑事一課の小川です」

運がいいのか悪いのか、小川は美智子好みのハンサムな顔立ちだった。死に顔からハンサムの顔に変わり、美智子は救われた気分になる。早速、美智子は手帳の中にある小川の個人情報収集する。

「小川和也さんですね」

腕を掴まれているにも拘らず、美智子は頬を赤らめ声のトーンが高くなった。

## 第7話 沼川海湖4

美智子が小川の顔に見とれていると、中年の箕浦は顎で救急車を示して言った。

「彼の知り合いの方ですか？」

「知り合いっていうか、つい最近まで短期のバイトでよく顔を合わせていたんです」

美智子の返事に、箕浦と小川は目配りをする。

次に口を開いたのは小川だった。

「彼について知りたい事があるので、恐れ入りますが署までご同行願えますか？」

「私をご同行ですか？」

刑事が連れて歩くのは容疑者。と推理小説では当たり前前の展開である。

それをよく知っている美智子は、私が容疑者なの！？ と焦ってしまい、口から間違った丁寧語が出てしまう。

小川はそんな美智子の様子を見て品の良い笑顔で言う。

「大丈夫ですよ。彼について、少しお話を聞かせて頂くだけです。ら。なんでしたらお茶も出しますのです」

二人の刑事の誘導はかなり上手く、美智子は知らず知らずのうちに歩かされ覆面パトカーの前まで来ていた。

「あの……、あの……」

美智子は小川しか見ていない。

「何か都合でも悪いのかな？」

そう言われて、美智子が右を見ると中年の箕浦の顔がある。美智子としては、中年オヤジより小川がいいと思い、しかし相手は警察の人間、箕浦に悪く思われるのもイヤなので、ニツコリと愛想笑いをしてから、すぐに小川の顔を見た。

「私、お茶より、アイスコーヒーが飲みたいです」

「アイスコーヒーも署にあるのでいいですよ」

小川は笑いを堪えながら言う。その反対側にいる箕浦は、遠慮の無い美智子の態度に顔を引きつらせている。

「無料ですよね？」

美智子の問いに、小川はついに笑い出した。

「署の飲み物は無料ですよ。あははは」

貧乏とは、人をここまで貪欲に、そして恥らう事さえもなくしてしまうのだろうか。

今年55歳になるベテラン刑事の箕浦は、今までいろんな事件を担当し、事件の陰で繰り広げられた人間模様を見てきた。それと同時に犯人やそれに関係する人々の様々な性格も見て感じてきた。

犯人を含めたそれらの人々はある程度似通った性質を持っている。というのが箕浦の持論だった。

だが、今箕浦が腕を掴んでいる美智子は、その誰にも該当しない性質を持っていた。

この娘はどう扱えばいいんだ？ この娘が犯人だとして、どう誘導尋問すれば素直に証言するのか？ 箕浦は覆面パトカーに乗り込みながら悩み考える。

小川と後部座席に座った美智子は身を乗り出す。

「わあ！！ 覆面パトカーの中っているんな機械があるんですね」

子供のようににはしゃいで機械に指をさして質問する美智子。

「あれあれ。あれは何ですか？」

「これはね、無線機の一部です」

小川は笑いながら答える。

箕浦は美智子を見て頭を抱える。こいつは刑事の管轄じゃねえ。保育士の管轄だ。と。

## 第8話 沼川海湖5

美智子は、四谷警察署に到着すると有無を言う暇もなく取調室に入れられた。

座っている美智子の後ろにある窓には鉄格子があり、普通の人間はその鉄格子を見て署内の物々しさを感ずるのだが、美智子は違っていた。

「ここが、かの有名な取調室ですね」

美智子は、嬉しそうに目の前の机を両手で触っている。

「机と、椅子と、……あれ？」

美智子は物足りなさを感じて首を傾げる。

同室している刑事の小川が聞く。

「どうしました？」

「カツ丼が無い。なぜ？」

美智子の疑問に、小川はまた笑い出す。

「あははは。美智子さんって本当に面白い人ですね」

「面白いって。私、真面目に聞いているのに……」

美智子は表情をムツとさせて、机の上にあったアイスコーヒーを飲み干した。

箕浦は取調室の外に立ち、取調室から漏れてくる美智子の声と小川の笑い声に頭を抱えていた。

「最近の若いもんは一体何を考えているのか。訳が分からん」

「箕浦さん。若者の考えも理解しないと。これからの捜査の相手は若者が主流になってくるんですから」

同僚の刑事に言われ、箕浦は顔をしかめる。

「ああ。分かつている。分かつてはいるが……」

箕浦は、バカな若者は受け入れられんという表情をしながら目の前に出された書類を見た。

「もう彼女の身元が割れたのか」

「彼女はプロの小説家のようです。ペンネームは沼川海湖」

「沼川海湖!? プロの小説家だと!!!」

驚きを隠せない箕浦の表情を見ながら同僚の刑事は首を縦に振る。「はい。出版も10冊以上出していますね。顔写真付きの本の紹介がインターネットに出ています。署に来てからの彼女のはしゃぎようつたら」

同僚の刑事は、来たばかりの美智子の様子を思い出して、笑いながら続けて言う。

「きつと彼女にとっては、この四谷署も小説のネタにすぎないんじゃないですか」

「なんてこつた……」

箕浦は急いで取調室のドアを開けて美智子を呼ぶ。

「美智子さん。わざわざ四谷署に来て頂き、真鍋幸彦についての情報提供を下さり有難うございました」

「え!? 私まだ何も話してないですよ」

美智子は2杯目のアイスコーヒーを飲みながら言う。

「美智子さんは、沼川海湖というプロの小説家だそうですね。我が四谷署としては、沼川先生に来て頂き、とても光栄です。もう帰って頂いていいですよ」

「はあ!? 私、真鍋ちゃんについて何も聞かれてないし、何も答えたくないです」

箕浦は丁寧な口調で言いながら、しかし行動は美智子を立たせようとして必死に腕を持ち上げる。

「ちょっと、強く掴み過ぎ。腕が痛いです」

美智子としては、まだ取調べが終わっていないので立つものかと机にしがみ付いている。

「小川、手伝え!」

箕浦の言葉に、小川は笑いながら反対側の美智子の腕を掴む。

「私、まだカツ丼も食べてないんです」

美智子は訴えるが、有段者の刑事2人にとって女性一人の体重は

小説家の沼川海湖です

軽く感じるようで、箕浦と小川は軽々と美智子の両脇を抱えて美智子を歩かせ、四谷警察署の外に出してしまった。

## 第9話 沼川海湖6

美智子は、箕浦が閉めようとした玄関ドアにしがみつく。

「あの、カツ井!」

「四谷警察署としては、無実の沼川先生を拘留する訳にはいかないんですよ」

箕浦は、美智子のカツ井発言は一切聞かず、美智子を締め出すためにドアを閉めようとして必死になっている。

美智子もカツ井が食べたくて必死になっている。

小川もドアを掴みながら、箕浦と美智子の間に入って言った。

「僕たちは、事件があったスターバックス横の路地に通う事になると思います。ほかの刑事もおりますので、美智子さん、もし何かありましたら、この四谷署にお越し頂いてもいいですよ、スターバックス横の路地に来て頂いてもいいですよ」

小川の手がズれて美智子の手に当たって止まり、小川の手の温もりが美智子の手に伝わる。

箕浦にカツ井を求めている美智子は、小川を見つめ急に大人しくなった。

「はい。そうします」

美智子は素直に引き下がった。そつと手を動かして、小川の手の下にある自分の手を抜いた。

美智子の手の小川の手が触れていたのはほんの数秒なのだが、美智子にとって小川の手の温かさは魅力的で、心の中心を刺激して、トキメキを感じずにはいられない。

だが美智子のトキメキはすぐに終わってしまう。同僚の刑事が美智子のショルダーバッグとノートパソコンを持って来て美智子に手渡したからだ。

美智子は自分の荷物を受け取ってノートパソコンを抱えると、四谷警察署に背を向けて歩き出した。

外は陽が暮れて薄暗くなっている。

東京新宿の夜の街は、明る過ぎて空の天の川は見えない。

美智子は、店に飾ってある笹とそこにぶら下がっている短冊を見て、七夕を思い出し新宿の夜空を見上げる。

「もうすぐ七夕か……」

その美智子の目にも天の川は映らない。ビルの衝突防止灯の赤い点滅が見えるだけ。

「年に1度の織姫と彦星の出会い。彼氏のいない私には無縁だわ」

それはいつもの事だと、美智子は気を取り直して自宅へ向った。

その数日後、七夕と無縁だと思っていた美智子は知るのである。

今回美智子が巻き込まれた事件には、悲しみと嫉妬により鬼になつてしまった織姫がいた事を。

7月2日。

新宿駅前は今日も晴れていた。

今回の事件は、目撃者がいないため捜査は難航すると思われていたが、事件があつた当日に被害者が持っていた携帯電話の通信履歴から7人の容疑者が浮かび上がった。

携帯にあつた登録名は、上野美佐、内山陽子、近藤房江、瀬田香織、野口里子、林泉、藤枝典子。全て女性である。野本美智子の履歴もあつたが、箕浦の独断で、美智子は容疑者から外されていた。

それともう1つ。遺体解剖の結果、真鍋幸彦の右犬歯の隙間に体毛が挟まっているのが発見され、その体毛は現在DNA鑑定中となっている。

ベテラン刑事の箕浦は、7人の容疑者からDNAを採取するため、若手刑事の小川と共に7人の容疑者の下へ出向く事になった。

## 第10話 容疑者：内山陽子23歳

内山陽子うちやまようこは、事件があつた次の日の朝一番に四谷署に呼ばれた。肩まである髪には緩いウェーブがあり、大きめの瞳で鼻筋が通つた顔立ちは、陽子を美人に見せていた。

箕浦と小川の取調べにより、陽子は新宿4丁目のビルで働いている会社員で23歳だと答える。

陽子が朝一番に呼ばれた理由は、真鍋幸彦の携帯電話にあつた通話履歴に明記されている時間が殺害推定時刻に一番近かつたためである。

箕浦は向かい合うように椅子に座り、内山陽子を注意深く観察しながら、言葉のどの部分で陽子が反応するのか、ゆっくりめの口調で真鍋幸彦の殺害状況を説明した。

犯行推定時刻は午後2時半ごろ。現在目撃情報は無し。遺体解剖の結果、体毛が発見されたのと、細く鋭い凶器で鳩尾から斜め上に向けて最低でも2回以上は刺されている。と。

その話を聞いた時、陽子は身を前のめりにし手の平を机の上に置いて体の上体を支えながら言い始めた。

「私、幸彦を殺していません。確かに昨日の2時ごろに携帯電話で幸彦と話したけど、それは次に会う約束をしたかつたからで」

「次に会う約束ですか？」

箕浦のオウム返しうまがしの質問に、陽子の動きが一瞬止まるが、陽子は箕浦の言葉を肯定してまた話し始める。

「そうです。だって、幸彦は、もう会わないって言うから」

箕浦と陽子の間にある机に手をつけて立ちながら話を聞いていた小川は、陽子の話に割って入り質問をする。

「もう会わないって言ったから、口論となつて彼を殺害したんじゃないんですか？」

「私、そんな事しません。どうして会いたいのに殺さないといけな

いんですか？」

箕浦は、興奮する陽子を落ち着かせるために、質問の方向を少し変える事にした。

「確かにそうですね。それでは2時半前後のあなたの行動内容を教えて頂けますか？」

「まだ私を疑っているんですか？」

箕浦は手を横に振って言う。

「いえいえ。これは殺害された真鍋幸彦氏の携帯電話の登録名簿にあつた方全員に伺っております、できれば2時半前後といわず、昨日1日の行動内容を分刻みで教えて頂きたいのです」

現実の取調べは、かなり緻密に行われる。例え犯人といえど自分の行動を分刻みで覚えているはずもなく、陽子自身も緻密な取調べ環境を知り、取調室に入れられた腹立たしさも手伝って、怒りが籠った言葉で言った。

「分刻みで、ですか？」

「そうです。できる限り分刻みで教えて頂きたいのです。これは内山さんの無実を証明するためにとても大切な事ですから」

箕浦にとっては、いつも取調室に来るたびに言ってきた言葉だった。だから陽子と似た心理状態の人間は何人も見てきている。そしてベテラン刑事である自分自身が、容疑者にどれほど精神的圧力を与える存在である事も重々承知していた。

「小川。俺はほかの奴と交代する。あとを頼むわ」

「分かりました」

箕浦はコンビを組んでいる小川にあとの取調べを任せると、内山陽子に会釈をして取調室を出た。

署内に設置してある自動販売機でオロナミンCを買い喉を鳴らしながら飲む。体をのけ反らし全てを飲みきって、上体を元に戻し前を見た時に、突然鑑識官の姿が目に入り、驚いて咽た箕浦は咳き込んだ。

「急に、ゴホツゲホツ、俺の前に現れるな」

「あ、すみません。気づいていると思っていたので」

鑑識官は若く、ベテラン刑事の箕浦を前にして、腰を引き気味にして言う。

箕浦は、低姿勢の鑑識官の態度を見てとりあえず腹立ちを収めた。鑑識官が手にしている紙袋に注目する。

「それはなんだ？」

鑑識官は紙袋を箕浦に手渡す。

「DNA採取キットです。今回被害者の口の中から、体毛が発見されたので、現在あがっている容疑者からDNAを採取して欲しいんですよ」

箕浦は袋の中に手を入れて中にあるものを取り出す。

「DNA採取は、検便と対して変わらん」

箕浦が持っているのは長さ10センチくらいの半透明の細長い筒だった。中に綿棒が入っており蓋を取った時に一緒に綿棒が取り出せるように、綿棒と蓋はあらかじめ連結してある。

鑑識官は、DNA採取キットを確認している箕浦を見ながら言う。

「必ず立ち会って確実に容疑者の口内の粘膜からDNAを採取するのを見届けて下さいね」

「ああ、分かってる」

箕浦は面倒くさそうに返事をした。

「じゃあ、今から内山陽子さんのをお願いします」

箕浦の動きが止まる。

「それぐらい、お前が行けよ」

「僕がですか？」

鑑識官は嫌そうに言う。

「当たり前だ。ちゃんと仕事をしろ」

ベテラン刑事の箕浦に言われ、若い鑑識官は「自販機の前で仕事をサボっていたくせに」とは言えず、渋々箕浦の言葉に従った。

## 第11話 容疑者：近藤房江40歳

次に取調室に来た近藤房江<sup>しんどうふさえ</sup>40歳は、各地にチェーン店を置く某エステティック会社の社長である。

同じ会社で夫と共に働く房江は一児の母でもあり、仕事と家庭を両立させていた。

房江は40歳という年齢ではあるが、大きな瞳と緩いウェーブの肩まである髪といった、内山陽子と似た風貌をしている。

箕浦は、分刻みというスケジュールの忙しい身の上の房江がどうやって真鍋と浮気をし、もし犯人ならば、どうやって真鍋を殺害したのか、房江の個人情報を得た時点で大きな疑問を持っていた。

「あの、失礼を承知で率直に伺いますが、昨日の2時半ごろ、どこにいましたか？」

取調室にいる房江は、入室した時から終始俯いていたが、箕浦の声を聞いてゆつくりと顔をあげた。

房江はエステティック経営会社の社長だけあって、40歳の今でも肌が綺麗で美人である。年を言わなければ30の前半に見える。

房江は箕浦の質問に答えようとして、昨日の事を思い出そうとしているのか、視線を泳がせながら答えた。

「昨日の2時半ごろは、新宿駅にいました」  
「新宿駅のどこに？」

「すいません。40になると思い出すのも一苦労で、スケジュールを調整してやっとの思いで作った余暇だったので、新宿駅周辺の店で買い物に奔走していたのは分かるんですが、時間ごとにどこにいたのかまでは、はっきりと覚えてなくて……」

箕浦は、どのような返事が返ってきてても動じる事なく次の質問をする。

「買い物をしたのなら、レシートを受け取っていますよね？そこに清算日時があるはずなんですが」

「すみません。会社の経費で落としているので、領収書は全て手書きで、時間まで書いてないんです」

「なら、後日担当の刑事が店に直接伺いますので、昨日行った店を全て教えて下さい。あと近藤さんのDNAを採取したいので、ご協力をお願いします」

箕浦は言ってから小川を見た。小川は無言で頷いて、房江にDNA採取キットを手渡した。

## 第12話 容疑者：上野美佐20歳

上野美佐は、四谷署の刑事の要請により取調室に入った。

午前、箕浦の取調べに、美佐は東京医科大学に通う20歳の大学生だと答えた。

その発言を気にして小川は質問をする。

「今日の講義に出席しなくて良かったのですか？」

美佐は、付け睫毛とアイラインで瞳が大きく見えるように化粧をしている。その付け睫毛で瞬きをしながら小川を見た。化粧で彩られた顔であるがブスではない。

「今日の講義？ 友達がノートをとってくれるから大丈夫です」

美佐は耳に大きな飾りのついたピアスをして、首にネックレス、腕にはブレスレットと派手な時計をしている。それらのアクセサリにはブランド名が刻印されており、美佐の派手な生活ぶりがかがわれる。

箕浦は美佐の体から香る香水の強い香りに息を詰まらせながら質問をした。

「殺害された真鍋幸彦さんとは、どのような関係だったのですか？」

「私さあー、幸彦が殺害されたって聞いてビックリしたのよ」

美佐はマイペースな性格のようで、箕浦の質問どおりに答えたりはしなかった。

「だって、昨日の朝別れるって携帯で話して、その日の午後には殺害でしょ。でも私、無実だから」

箕浦は、例え質問とは違う答えが返ってきてても、美佐の言葉を遮らずに首を縦に振って相槌をうっている。

小川も箕浦と美佐の間に立ち、美佐の話を黙って聞いていたが、美佐が話し終えた時に、一呼吸を置いてから美佐に告げた。

「実はその無実についてですが、昨日電話で上野さんから伺った、事件時間に会っていたという男性に、確認をとったところ、その男

性は美佐さんと一緒にいた事を否定しました。よって、現在の美佐さんには、無実を証明するアリバイが無い事になりますか」

「はあ？」

美佐の語尾を延ばして驚く姿を見て、箕浦は彼女の美人の面立ちが崩れたな、と思った。

美佐は、本当に男と会っていたのか、それとも口裏を合わせただけなのかは、その男性を取調室に呼ばないと分からないが、美佐の落ち着きをなくした姿を見る限り、男性が美佐を裏切ったのはまぎれもないだろうと、箕浦は思った。

美佐は椅子を後ろに引いてから足を組む。肩まである毛先を弄りながら、机のどこか一点を見つめて、誰も質問をしていないのに勝手に話し出した。

「なんで私といたのを否定するのよ。開業医の息子っていう堅苦しき生活はイヤだって言っていたのはあつちなのに。だから私、昨日幸彦が別れようって言ってきた時にイエスの返事をしたのにさあ！。なんであいつ、私を裏切ったのよ？」

箕浦は、不機嫌に言う美佐を注意深く観察しながら、冷静に返事をした。

「詳しい事が分かりませんので、明日にでもその彼と連絡を取り、事実確認をしてみます。とりあえずですが、上野さんのDNAを頂きたいので、これで頬の内側を擦って頂けませんか？」

箕浦は、胸ポケットから細長いDNA採取キットをタバコのように取り出して、美佐に手渡した。

「ああ、DNA採取ね。私、医大生だし、法医学にも興味があるから、それ知ってる」

そう言いながら美佐は慣れた手つきで自分の頬の内側を綿棒で擦ると、きちんと蓋としてDNA採取キットを返却した。若くてハンサムな小川のほうに。

DNA採取キットを受け取ろうと手を出していた箕浦は、何事も無かったかのように手を自分の膝の上に置いたのだが、中年嫌いの

小説家の沼川海湖です

素振りを平気で見せる露骨過ぎる美佐の態度に腹立ちを覚えたのは  
言つまでもない。

### 第13話 容疑者：野口里子26歳

午前の昼近くに四谷署の取調室を訪れた野口里子のくちりこは苛立った表情をしていた。

その後の取調べで、里子は26歳の新妻だと答えている。やはり里子も、瞳が大きく、長さが肩まである緩いウェーブがかかった髪形をしている。

この頃の箕浦は、既に殺害された真鍋が付き合っていた女性の共通点に気付いていた。

「昨日の2時半ごろ、どこで何をしていましたか？」

「新宿駅の高島屋で買い物をしていました。それだけです。真鍋さんを殺してはいません」

里子は、箕浦の質問に答えるが、落ち着きが無く、右手の人差し指がかなりの速さで動き、しかし音を立てないようにしながら机を叩いている。

箕浦は里子が動かしている右手の指を見てから次の質問をした。

「昨日の午前、真鍋幸彦氏の携帯電話に野口さんとの通話記録が残っているのですが、何を話したのですか？」

「別れ話ですよ」

里子はムツとした表情を横に向けて話し始めた。

「今の主人と結婚をするずっと前から、真鍋さんとは付き合っていました。体の相性がよかったです。でも年収は主人のほうがあったので。昨日、真鍋さんから別れるって言われた時は悲しかったけど、結婚はよく考えてから主人を選んだので、未練はありませんし、殺す理由もありません。あの、もう帰っていいですか？」

箕浦は無言で首を縦に振った。その後すぐに小川に目配りをする。

小川は、里子にDNA採取キッドを手渡した。

「これで野口さんのDNAを採取しますので、終わったら帰って頂いていいですよ」

里子はDNA採取キットを小川に返すと「何もしていないのに、なんで浮気の話をしてはいけないのよ。不愉快だわ」と言い捨てて取調室を出て行った。

小川は里子を見送ってから箕浦に言う。

「箕浦さん、殆どしゃべらなかつたですね。野口里子は苦手なタイプですか？」

「いや。害者と付き合っていた女性というだけあって、容疑者の特徴が似通っているから、難しい捜査になるなと思っているだけだ。

DNA鑑定が捜査の決め手になってくれるのを祈るばかりだな」

既に昼食時間。箕浦は疲れた表情を見せて、目頭を押さえて疲れた目をマッサージした。

## 第14話 容疑者：瀬田香織17歳

瀬田香織は、新宿駅近くの東京都立新宿高等学校に通う17歳である。せだかおり

箕浦と小川は、幸彦の携帯電話にあつた電話番号で瀬田香織に連絡をとり、新宿高等学校の門で待ち合わせる事にした。

今は期末テストの期間中のため高校は昼で終わる。

約束どおり門の前に現れた香織は、校則どおりのきちんとした身なりをしている。香織もほかの容疑者と同じ特徴を持っていて、髪型は肩下5センチくらいの長さで軽いウェーブがかかっている。

箕浦と小川は電話で話しただけでまだ香織を見た事がない。なぜ門の前に来た女子高生が香織だと思ったのか。それは箕浦の長年の捜査経験からくる勘だった。

「瀬田香織さんですね」

「はい。そうです」

箕浦の言葉に香織は返事をする。

香織は丸顔で目がパッチリと開き、色白の肌にピンクの薄めの唇をしたあどけなさが残る女性だった。

美人というよりキュートでかわいいといったほうがいいのかもしれない。

香織は長い睫毛でパチリパチリとゆっくりりめの瞬きをしながら箕浦と小川を交互に見た。

小川はスーツの内ポケットから手帳を出して香織に見せる。

「四谷署の刑事一課の小川です」

「私は箕浦です。テスト期間中というお忙しい中、お呼びして申し訳ありません」

箕浦は手帳を見せずに話を進める。

「電話で話したとおりなんです、真鍋幸彦の携帯電話にあつた通信記録者のDNAを集めております。あなたのDNAを採取させて

頂きたいのですが、ご協力頂けますか？」

「DNA？」

香織は高校3年生。既に授業で習っているのでDNAがなんなのか知っているのだが、それでも訳が分からないといった表情をして、  
「どういう事なのか聞き返してしまうようだ。」

小川が紙袋からDNA採取用のキットを取り出す。

「この綿棒で口内粘膜を提供して頂きたいのです。頬の内側を軽く擦って頂くだけでいいのですが」

「分かりました」

香織は小川に言われたとおりに綿棒を受け取り頬の内側を擦ると綿棒を小川に返した。

「ご協力感謝します」

小川はすぐに綿棒を専用のケースに入れる。

香織は小川が持っている綿棒をじつと見ていた。

箕浦は取り出したメモを読みながら言う。

「昨日の午後2時から3時にかけて新宿駅内でウインドウショッピングをしていたというのは間違いありませんか？」

「はい」

瀬田香織は箕浦の質問に素直に答えていく。

一通りの質問の答えをメモした箕浦は香織に頭を下げた。

「テスト期間中なのに、大切なお時間を取らせてしまってすいませんでしたね」

「いえ、別に」

「今後も真鍋幸彦について分からない事があつた時は、お尋ねすると思いますので、宜しく願います」

話が終わりに近づき、瀬田香織は初めて笑顔を見せる。カバンの中から携帯電話を取り出した。

「分からない事はメールで聞いてくれればいいですよ。メルアド交換します？」

「はい？」

箕浦は驚いた表情をする。

小川は慣れた様子で箕浦の代わりに返事をした。

「お気持ちはいがたいのですが、捜査は守秘義務が生じますので、今後の話は署の中で伺うこととなります。メルアドの交換ができません」

「いえ」

香織もメールアドレスの交換を求めた相手が警察の人間だったと改めて思い、軽率な発言を静かに笑って誤魔化した。

箕浦と小川は瀬田香織と別れてから車に乗り込む。

助手席に座った箕浦は座席シートにどっぷりと深く座り腰を落ち着けた。

「最近の若いもんは、しかも嫁入り前の娘が、俺のようなオヤジとも平気でメールアドレスを交換するのか。信じられん時代になったもんだ」

小川は運転席に座りながら言う。

「僕たちが警察の人間だったから、安心したんじゃないですか？」

「それならそれでいいが……」

何か言いたそうな箕浦を乗せて、小川が運転する白いセダンは走り出した。

## 第15話 容疑者：藤枝典子35歳

ふじえだのりこ  
藤枝典子は35歳。新宿駅に隣接している某デパートで働く一児の母である。

典子もほかの容疑者と似た顔の作りで、大きな瞳に、緩めのウェーブがある髪を肩まで伸ばしている。デパートで働くだけあって薄化粧でも充分美人でスマートな体型をしていた。

典子も夫に内緒で真鍋幸彦と浮気をしていたのだが、7人の容疑者の中では一番真面目なタイプかもしれない。

「デパートでパートをしていまして9時から2時まで働いています。昨日も2時まで働いていました」

「それでは、藤枝さんの2時からの行動内容をできるだけ正確に教えて下さい」

箕浦の質問に、典子は昨日の事を思い出そうと真剣な表情になる。「仕事が終わってすぐ同じデパートの地下にある食品売り場に行きました。入ってすぐの所にある店の漬物を試食して、その隣の店で肉を買って」

典子は真面目に話すが、内容が事件と関係がなかったため、箕浦は典子の話の途中で次の質問をする事にした。

「食品売り場ですつと買い物をしていたという事ですか？」

「ええ、そうです」

「それでは、真鍋幸彦氏について伺いたいのですが、真鍋氏に最後にあつたのはいつですか？」

「おとついの午後です。真鍋さんから別れようってメールが入っていて、ビックリして喫茶店で直接話を聞いたんです。真鍋さんは、自分はもう35歳だから真面目に暮らしていく決心をした、と言っていました」

箕浦は、典子のあまりにも真面目過ぎる態度に疑問を持った。普通なら取調室に入った時点でなんらかの動揺があるはずなのだが、

典子はとても落ち着いていて質問に対しても真面目に答え過ぎるのだ。

小川は箕浦の様子が変わった事に気付いて、箕浦の視線の先にいる典子に注目した。

箕浦は典子の心理状態が知りたくて、典子に込み入った質問を試みた。

「藤枝さんは浮気をするタイプには見えないのですが、本当に真鍋幸彦氏と浮気をしていたのですか？」

「はい。主人に内緒で浮気をしていました」

デパートで働いているだけあって応対に慣れているのか、箕浦の質問に典子はさらりと答える。

「なぜ真鍋氏と浮気をしたのですか？」

「それは……」

典子はこの質問で初めて様子を変え表情を曇らせながら話し始めた。

「主人が浮気をしたんです。主人はまだバレてないと思っていて、今も関係が続いています。私、最初はただの女遊びだと思って我慢していました。でも、出張だと嘘をついて浮気を続ける主人に我慢ができなくなつて、主人が出張した日の夜に、私も出掛けて居酒屋で独りでお酒を飲むようになりました。その居酒屋で出会ったのが真鍋さんでした。私の辛い思いをとてもし理解してくれて、それで主人が出張する日に会うようになったのです」

話が終わる頃、典子の瞳には涙が込み上げていた。

箕浦は「そうでしたか」と静かに言い、夫の浮気によって狂ってしまった典子の夫婦生活を気の毒に思った。

その後、典子は両方の大きな瞳から涙を流し思いつきり泣いてから、小川が差し出したDNA採取キットを受け取ったのである。

## 第16話 容疑者：林泉30歳

林泉は胸はやしこみが大きい女性だった。

夕暮れの取調室。泉はごく普通に椅子に座っているだけなのに、泉の胸は机の上に載っているように見えて、箕浦も小川も、調書の記録担当者も、泉本人に気付かれないように机の上にある巨乳にチラチラリと視線を送っていた。

泉は30歳。公務員の夫を持つ二児の母である。やはり泉の瞳も大きく、髪も緩いウェーブで肩まである。

「昨日は幸ちゃんとホテルにいました。幸ちゃんとは午前で別れて家で昼食を摂ってから、午後はプールで泳いでいました。細かい時間まで覚えてないわ」

泉は艶のある声でおっとりとした口調で話す。夫がいる身でありながら浮気をしている恥と後悔は微塵も無い様子だ。

箕浦は聞きにくそうに質問をする。

「ホテルにいたというのは、やはり？」

「ええ、いろいろしていました。何をしていたのかは、私より年上のあなたのほうが分かるわよね？」

「まあ、そうですね……」

泉に聞き返され、箕浦は頷くに頷けず鼻の天辺に脂汗をかき始める。箕浦は即小川に目配りをする。それは「仕事でこういう女は相手にしたくない」という箕浦なりのSOS信号だった。

小川も「僕も無理です。セクハラと思われたら面倒な事になるの」と目配りで返事をする。

結局「役に立たん奴だ」と箕浦からの視線攻撃を受け、小川が心にダメージを受けたところで、箕浦が苦しみながらエロ好き専業主婦の泉に質問をする事になった。

「昨日ホテルで会っていた時の真鍋幸彦との会話内容をできるだけ正確に教えて下さい」

泉は、かなりゆっくりな瞬きを1回だけしてから箕浦を見た。

「ホテルで会っていた時の会話って、男の人が一番知っているんじゃない。それを聞きたいって、これも刑事さんのお仕事なの？」

「申し訳ありませんが、事件に関する事なので」

中年といえど箕浦も男。理性を失わないように心の中で「自分は刑事だ。しつかりしろ。仕事だ。終わったらDNAの採取だぞ」と念仏のように唱えるしかない。

泉はゆっくりと体を上下させて座り直した。その時に胸もそれなりに揺れ動いたのはいうまでもない。

「ホテルの部屋に入った時に、幸ちゃん、これを最後に別れようって言ったの。ほかの女性とも別れるって言っていたわ。だから私、幸ちゃんとは最後だと思って、昨日は大声が出てしまっくらい、いろんな事をしたのよ。その時、私が言った言葉は x x

……」

その後、箕浦たちはエロ好き主婦のホテルでの情事を聞かされる事になり、しかし泉の話を守る者は誰一人としてなく、真面目な箕浦も、ハンサムな小川も、調書の記録担当者も、それぞれ黙々と自分に与えられた刑事としての立場を貫いたのである。

## 第17話 その後の捜査状況

7月4日。

新宿駅前には、入梅したした事もあつて雨が降っている。

四谷署内にいる箕浦は刑事一課に置かれた自分の席に座り、一課の同僚たちが集めてきた7人の容疑者の資料を見ていた。左隣には小川が座っている。

小川は資料の中から上野美佐の資料を引き抜いた。

「上野美佐は、容疑者から外れたので、この資料は捜査済みとしてファイリングしておきますね」

「上野美佐？」

箕浦は別の容疑者の資料を見ていたために美佐を思い出すのに時間がかったが、思い出してからはげんなりとした表情になる。

「真鍋氏とも付き合い、同じ東京医科大学に通う男とも付き合っていた女性か。男は最初、美佐との付き合いを否定したが、男の母親からの電話で、事件時間にデートをしていました。今後は正直に答えるので、捜査のためにうちの病院前をうろつくのはやめて下さい。つて苦情になつたやつか」

「ええ、そうです」

小川がファイリングをしている横で、箕浦はポツリと呟く。

「世の中、医師不足になる訳だ」

「何か言いました？」

「いや、なんでもない」

小川に聞こえなかったようで、別に大した事ではないと思つた箕浦は、再度言うのをやめて、さつきから見えていた資料に視線を落としました。

箕浦が持っているのは林泉の捜査資料。真鍋の右犬歯の隙間に挟まっていた体毛はDNA鑑定結果から泉のものであると判明したのだ。ただちに捜査令状を出して泉を拘留する事もできるのだが、泉に

は真鍋を殺害した動機が無く、箕浦としては納得のいかない結果内容に頭を痛めていた。

箕浦は考えて悩み息が詰まりそうになって、深呼吸ついでに背伸びをする。その後、椅子にもたれて天井を見てから目をつぶり、拳で額の中心を軽くこついた。これは捜査が行き詰まった時に行く、勘を働かせるための箕浦なりの儀式である。

その儀式のあと、小川は箕浦に怒鳴られないように気をつけながら手を伸ばして、箕浦の机の上にあった捜査資料を手にとった。

「藤枝典子も、事件時間にデパ地下の防犯ビデオに映っていたので、容疑者から外しておきますね」

「ああ、頼む」

資料に集中している箕浦からは気の無い返事が返ってくるだけである。

現在の容疑者は、内山陽子、近藤房江、瀬田香織、野口里子、林泉、の5人。

5人ともよく似た風貌で、真鍋から別れ話を持ちかけられているという同じ共通点があるだけに、ベテラン刑事の箕浦でも、そこから犯人を割り出すのはかなり難しい。

その後、捜査が進展するような新しい情報は無く、時間が過ぎて夜になってから、四谷署に林泉が殺されたという連絡が入り、箕浦たちは徹夜同然で捜査を進めることになった。

7月5日。

箕浦たちは、文京区にある林泉の自宅前に来ていた。閑静な住宅街の中に泉が暮らす一戸建てがある。

泉は昨夜の23時ごろに自宅前で遺体となって倒れているのを通りかかった人によって発見されたのだ。

殺害の手口は、真鍋幸彦の殺害状況と似ていて、鳩尾を鋭利な刃

物で一突きにされていた。

泉の遺体は遺体解剖のために搬送されたが、夜が明けて朝になった今も捜査のために自宅前に広がる泉のものと思われるおびただしい血の量はそのまま残されている。

現在、殺害現場は野次馬の目に触れないように青いシートに覆われていて、箕浦はその横で聞き込み捜査を行っていた同僚から、集まった情報を聞いていた。

同僚は箕浦に伝える。

「目撃者いました。22時50分ごろ、近所に住んでいる主婦が自宅の2階の窓から、玄関前で帽子を被った女性と話をしている林泉を見たそうです。その女性の服装は、色の濃い婦人用の長袖のビジネススーツに、帽子を被り、帽子の下から肩下まである波のような毛が見えていたそうです」

「肩下の波のような毛か……」

ベテラン刑事の箕浦は4人になった容疑者の顔を順番に思い出していく。箕浦の勘が、犯人は4人の中にいると伝えているのだ。

「小川。今から4人の容疑者のところへ行くぞ」

「はい」

小川は急ぎ足で車のエンジンをかけに行った。

## 第18話 再会1

7月6日。

残りの容疑者は、内山陽子、近藤房江、瀬田香織、野口里子の4人。

箕浦と小川は、昨日4人の容疑者から23時ごろの行動内容を聞いたのだが、4人も家族と自宅にいたというアリバイがあり、誰一人として崩れない4人の完璧なアリバイに頭を悩ませていた。

午前の新宿駅前には薄曇りではあるが晴れている。

箕浦は捜査の行き詰まりを感じ、小川と共に真鍋が殺害されたスターバックスコーヒー新宿新南口店の横にある路地りに来ていた。

真鍋が殺害された現場には供養のための蝋燭と線香と生花が置かれている。

「犯人は高い確立で犯行現場に戻る」

箕浦は置かれている花を見ながらポツリと呟いた。

「ここで張り込んでいる担当者によると、瀬田香織以外は全員ここに来て手を合わせているそうです。瀬田香織が来ないのは、まだテスト期間中というのと、援助交際紛いの浅い付き合いだからだと思いますが」

箕浦は意見を言った小川を睨んだ。

「最近の女子高生はな、親にも学校にも内緒で妊娠をして卒業するんだ。何の根拠も無しに浅い付き合いと決め付けるな。分かったな」

「……はい」

箕浦に一喝されて小川は反省しながら返事をした。

箕浦は眉間にシワを寄せて若手刑事の小川の判断に苛立ちを覚えていたが、後ろから声を掛けられて、苛立ちを忘れてしまうほど驚く事になる。

その声の主は野本美智子。沼川海湖というペンネームでファンジ小説を書いているプロ小説家の美智子だった。

美智子は、左右に垂れ下がったお下げと、肩から提げているシヨルダーバックという、出会った時とほぼ同じ姿をしている。

「あ、小川和也さんだ。お久しぶりです」

「先日はどうも」

小川は笑顔で会釈をする。

箕浦は美智子と目が合わないように横を向いた。

美智子は、箕浦の態度をなんとも思わないのか、それとも仕返しなのか分からないが、年上の箕浦に遠慮なく指をさす。

「えっと確か……、そうそう箕浦次郎さん。次男って分かりやすい名前ですよ」

「長男だ。控えめに細く長く生きれば良いという意味で、親が次郎と名付けてくれたんだ」

箕浦は抗議のつもりで言ったのだが、美智子にそれは伝わらない。

「へえ。次郎さん思いのご両親なんですね」

美智子のペースについていけず、箕浦は嫌悪の表情を表して鼻筋にシワを寄せてた。

「なんでお前がここにいるんだ？」

「バイトが無い時は、いつもそのスタバで小説を書いているんですよ。それに、犯人は高確率で犯行現場に戻るっていうし。事件の時、私もここにいたから、もしかすると犯人の顔を見ているかもと思って。もう一度犯人の顔を見たら思い出すかなあー。って」

箕浦の顔色が変わる。箕浦は自分の意思で美智子と視線を合わせた。

## 第19話 再会2

「お前、それを誰かに話したか？」

美智子は細長の眼鏡の顔でにつこりとする。

「いいえ。まだ誰にも」

箕浦は周囲を見回してから、自分の口元を隠して小声で小川に言った。

「小川、4人の顔写真を持っているか？」

「胸ポケットに」

「すぐに出せ」

「はい」

箕浦は小川から写真を受け取ると、美智子にそれを見せた。

「どうだ？」

美智子は順番に四人の顔を見ていく。

「すっごーい！ 同じ顔の人間は世界に2人いるっていうけど、4人もいる」

感嘆符を口の前に並べている美智子を、箕浦は半ば急かしながら言う。

「どうなんだ？」

「この人、見たことあるかも。事件のなん日か前だけど、スタバでコーヒーを飲んでたと思う」

美智子が示したのは近藤房江の顔写真だった。

箕浦は顔をあげて小川と目配りをする。

そして、箕浦たち3人が気づかない離れた場所で、婦人用のビジネススーツを着た犯人は、美智子に釘入るような視線を送っていた。美智子は、そうとは知らずに小川を見ながら笑顔で話している。しばらくして話が終わり、美智子は携帯電話の時計を見ながら言う。

「大変、もう9時半だ。今日は10時から編集担当と打ち合わせが

あるから、そろそろ出版社へ行かないと」

美智子は小川との別れを惜しみながら言う。

箕浦は会釈をして去っていく美智子の肩を掴んだ。

「おい。今日の事は誰にも言うなよ」

「分かってます。それ守秘義務っていうんでしょう？」

美智子は言うが、小説のネタだと思っっている美智子の考え方が一番の不安要素だと箕浦は思う。

美智子はまた携帯電話の時計を見てから「打ち合わせに遅刻する」と言っ走り出した。

箕浦は美智子の後ろ姿を見ながら携帯電話で四谷署に連絡をした。「至急、野本美智子の身辺警護の手配をお願いします。現在は打ち合わせのために出版社に向っっていると思われます。犯人が我々を見ている可能性があるのです、詳細は署に戻っしてから報告します」

箕浦は携帯電話を閉じると、小川と共に急ぎ足で白いセダンに向っった。

## 第20話 犯人1

7月6日。9時半過ぎ。

箕浦たちと別れた美智子は、新宿駅から歩いて20分くらいのところにある某出版社へ急ぎ足で向っていた。

遅刻しそうなので走らなければならないのだが、先ほど走って既に息が切れていた美智子は、息が続かなくて歩くのがやっとになっていた。

「ああ。間に合うかな」

遅刻が理由だろうとなんだらうと怒鳴られるのはよくあるので慣れているのだが、仕事を減らされるのは何回経験しても全く慣れない。

先月の小説の売り上げで得た収入は約3万。

プロの小説家とはいえ収入が少ない美智子に両親は「会社員になって真面目に働け。でなければ早く嫁に行け」と説教をする毎日だ。作家業は自分で選んだ道ではあるが、美智子は遅刻しそうな今の現状から逃げ出したい気分ではいっぱいだった。

「待ち合わせの時間まであと3分」

急ぐ美智子の目には、通りを3本越えた先にある出版社のビルが見えている。

「あともう少し。頑張れ、私！ 頑張れ、小説家、沼川海湖！」

美智子は自分自身を応援し、呼吸を整えてから残りの距離をダッシュで走ろうとした時に、目の前に立っている彼女の姿に気づき、美智子は足を止めた。

「うそぉー。なんでここにいるの？」

まだ距離がある彼女に美智子の言葉は届かない。

彼女は歩いて美智子に近づいて来る。夏用に仕立てられたミント色の婦人ビジネススーツ姿で。帽子も被らず、サングラスで顔も隠さず、ごく普通に歩いて、美智子の前で立ち止まった。

「初めまして。で、いいのかしら？」

そう言った彼女は近藤房江だった。

美智子は、稼ぎが少なくてもプロの小説家。専門ジャンルはファンタジーだが、一応推理小説を書くノウハウも身につけている。だからこそ、無意識のうちにも目の前にいる近藤房江の心理状態を予想してしまう。だが、美智子はそれを認めたくなくて、頭の中にある予想を打ち消した。

「初めまして。私に何か御用ですか？」

美智子の動揺の無い言葉を聞いて、房江は赤く塗られた唇を動かした。

「初対面で声を掛けられたのに、驚きもしないなんて、不自然だわ」「プロの小説家なので、初対面の人に声を掛けられるのはよくあるんですよ」

身構える美智子の姿を見て、房江の瞳は冷たい光を帯びていく。

「本当に初対面だったのね」

「でも書籍に私の顔写真がついているので、読者にとっては初対面じゃないかもしれませんけど」

美智子と房江との距離は約2メートル。

## 第21話 犯人2

美智子は房江の後ろにある出版社のビルを見るが、房江を通り過ぎるのは危険かもしれないと、頭の中で警鐘が鳴っている。

房江は足を動かして2メートルの距離を縮め始めた。

「ごめんなさい。小説家さん。あなたにはなんの恨みも無いの。私の早とちりだったみたい」

美智子が立っている歩道には、ほかの通行人が歩いているのだが、房江に注目している美智子には、通行人が色褪せたモノクロの虚像にしか見えない。美智子が凝視している房江だけが強調された色の濃いカラーで見えていた。

「真鍋ちゃんにも、そう言ったんですか？」

「真鍋ちゃん？」

房江は顔の半分を歪ませる。

「あなたも幸彦と関係がある人なの？」

周りには通行人がいる。だが事が起こっても通行人は誰も自分を助けてはくれないだろう。それでも美智子は賭けに出る。もし目の前の彼女が犯人なら、きつとそれなりの行動を起こすからだ。うまくいけば、犯人と格闘した自分が新聞に掲載されるかもしれない。今の美智子の頭には、死んでしまっただけでは遅い、というお決まりの文句は無かった。

「もし私が、真鍋ちゃんと関係があったら、どうなるんですか？」

「どうなるんですって？ こうなるのよ」

房江は顎を引いた。上体を前に倒して走り出すと同時に、右手を左の袖口に入れて、そこから果物ナイフを引っ張り出した。

房江が持っているナイフを見た通行人が悲鳴をあげて逃げ出す。

美智子の考えどおり、通行人は逃げるのが精一杯で、誰も美智子を助けようとはしない。

美智子は、とっさに肩にあったショルダーバックを持つと、向っ

て来た房江にバッグをぶつけた。

シヨルダーバッグの中には、命の次に大切な沼川海湖の分身ともいえるノートパソコンが入っている。

房江は突き出した右腕にバッグの打撃を受けて、持っていた果物ナイフを落とした。

美智子は、ナイフと拾おうとした房江の左腕を掴んで引つ張る。

「これ以上、人を殺さないで！」

房江は髪を振り乱し唸りながら少しずつ足を進め、少し先に落ちている果物ナイフを拾うために、腕を掴んでいる美智子を引き摺って行く。

力勝負では、小説家の美智子より、エステティックを経営している房江のほうが上のような。

ついに房江は果物ナイフに手が届き、手繰り寄せてナイフの柄を掴むと、振り返って左腕を掴んでいる美智子に向って果物ナイフを振り上げた。

## 第22話 犯人3

房江が急に振り返ったため、房江の腕を引っ張っていた美智子は、勢いが後ろへつき過ぎて、バランスを崩してほぼ真後ろに倒れ込んだ。反射的に上体を捻り地面に手をつけて、倒れた衝撃を軽減したものの、この時の美智子には、覆いかぶさるようにして向って来た房江のナイフを防ぐ術はもう残っていなかった。

殺される！ 美智子がそう思った時、箕浦が現れて護身術を使い房江の体を弾いた。

体を弾かれた房江はバランスを崩して果物ナイフを持ったままよろめく。

その房江の横に小川が現れて、護身術でナイフがある房江の右手の動きを封じて、足をかけて房江の体を倒して地面に押さえつけた。箕浦が駆け寄り、ナイフを取り上げてから房江の両腕に手錠をかける。それから五分とたたない内に市民から通報を受けた警官が駆けつけて、房江は立たされて連行されて行った。

美智子は地面に尻をつけて、呆然とした表情で房江が取り押さえられて連行される様を見ていた。

小川は流れた汗を拭いながら、まだ地面に座っている美智子に歩み寄る。

「沼川先生、大丈夫ですか？ お怪我は？」

「お怪我？」

美智子はハツとした表情をして、四つん這いになって地面を移動して、ショルダーバッグの中を覗く。衝撃吸収ケースに包まれたノートパソコンを取り出して、スイッチを入れて起動したノートパソコンの無事な状態を見てから、美智子はやっと口を開いた。

「大丈夫みたいです」

「いや。そうじゃなくて」

小川は、緊張がほぐれた事もあり静かに笑ってからもう一度言い

直した。

「あなた自身は大丈夫ですか？」

「私自身……」

美智子はやつと物事が収まったと実感して目に涙を浮かべる。

「私も大丈夫だと思います」

そして美智子はノートパソコンを抱えながら泣き出した。

「怖かったあー。死ぬかと思ったあー。もうあんな事しない」

箕浦が四谷署との連絡を終えて美智子の所へ来た時、美智子は子供のように泣いていて、一緒にしゃがんでいる小川に宥められていた。

「刺されたように見えたが、大丈夫そうだな」

「ええ。身边警護の者を待たず、沼川先生を追いかけて正解でしたね」

振り返った小川は、美智子の頭を撫でながら箕浦に返事をした。

## 第23話 推理1

7月6日の夜。22時ごろ。

西には沈みかけた細い三日月が見える。

美智子は、白いセダンに送られて自宅に到着した。

両親と兄と暮らしている美智子の自宅は中野区にある。

美智子を自宅まで送ったのは箕浦と小川で、近藤房江が捕まったあと、美智子も四谷署で事情聴取を受けたのだ。

美智子が車から降りると、その美智子を見送るために箕浦と小川も車から降りて来た。

自宅の玄関を潜ろうとした美智子は、ふと思い振り返る。

「犯人のアリバイは、殺人事件とは知らずに仕事の事情だと思って口裏を合わせていた夫の証言で崩れたのは分かったけど……」

美智子は上目づかいで箕浦を見ながら話を続ける。

「守秘義務があるのは分かっていますが、私も真鍋ちゃんを知る人間なので、真鍋ちゃんが殺害された動機が知りたいです。小説に書かないし、誰にも言わないので、犯人の動機を教えてくださいませんか？」

箕浦は大きく呼吸をして、鼻からゆっくりと息を出した。

「近藤房江は、まだ自供してないんですよ。取調べ担当者によると、近藤房江は泣いてばかりいるようで、事情聴取ができる状態じゃないそうです。まあ、1時間前の情報ですが」

美智子は視線を落とした。

「きっと話せない事情があるんですね。真鍋ちゃん、バイトで一緒にした時に言っていました。今度こそ本当の愛を見つけたから、フリーターは卒業して、定職につくって」

「なんで今頃になって、そんな話を」

箕浦の言葉に、美智子は口を尖らせる。

「私の話を聞いてくれなかったのは刑事さんたちじゃないですか。」

質問ばかりして。質問以外の事を話すと怒るし。今日もカツ丼食べれなかったし」

美智子は夜空を見上げる。中野区の夜空も天の川は見えない。

「確か容疑者は7人で、全員女性だったんですよね？」

「そうです」

小川が肯定の返事をしたので、美智子は喜んで一瞬だけ笑顔になる。

「中国にも七夕伝説があつて、中国の織姫は7人もいるんです。一番年下の織姫が彦星と一緒になつて、男女の子供を産むんです。関係が無いかもしれないけど、同じ7人だから、真鍋ちゃんが愛した女性は、中国の織姫のように、一番年下の人のような気がして」

箕浦は嫌味交じりで言う。

「小説家さんらしい発想だな」

## 第24話 推理2

美智子は1度口を閉じるが、宣戦布告という意味を含めて箕浦と視線を交わしてからまた口を開いた。

「小説家の私の考えですが、犯人はその織姫の実の母親だったんじゃないのかな。私が見た顔写真は、血の繋がりがあって説明をしたら誰もが頷いたと思うくらい、似た女性ばかりだったもの。きつと織姫も、母親である犯人に似ていて、真鍋ちゃんはそれで織姫を好きになって、やっと本当の愛を見つけたんだと思う。でもその幸せは続かなくて、離婚か養子に出したかなんかで織姫と犯人は苗字の違う実の親子で、犯人は実の娘に手を出した真鍋ちゃんが許せなくて、女としての嫉妬もあって、真鍋ちゃんを殺してしまったんじゃないのかな」

小川はそつと美智子の背中を押した。

「沼川先生。体が冷えるといけないので、家に入りましょうか」  
「うん。でも最後にもう1つだけ」

美智子は小川を見て頷いてから箕浦を見た。

「もし織姫が、真鍋ちゃんとの間にできた娘だとしたら。実の父と娘が親子だと知らずに肉体関係をもってしまっていたら。それを知った母親は、何を考えて何を思ったのかな」

箕浦は真顔になる。そして真剣な表情になって言った。

「申し訳ありませんが、それ以上の話はしないで頂けますか？ 例え小説の中だけの話だとしても」

しばらく三人の沈黙が続く、美智子は口を閉じて箕浦と小川を交互に見ていたが、また夜空を見上げて話し始めた。

「そうですね。守秘義務がありますもんね。でも1つだけ小説家の私でも考えつかない事があるんです。なぜ二人目が殺されたのか……」

箕浦は、美智子の背中を押して歩かせる。

「もう考えるのはよみましょう。我々も署に戻ってやらなければならぬ事がありますので。おやすみなさい。沼川先生」

門を通った美智子を見届けてから、箕浦と小川は白いセダンに乗り込んだ。

箕浦はシートベルトをしてから小川に言う。

「すまんが、車を門につけてくれ」

「はい」

小川はにやつきながら返事をして、発進させた車を美智子の自宅の門に横付けする。

箕浦は、助手席のガラス窓を下げてから言った。

「事情聴取が取れていないので、私の刑事としての経験上の作り話なんですが」

箕浦は、ここで初めて美智子という人格を受け入れ、ライバルに挑むような視線を美智子に送りながら言葉を続ける。

「二人目の被害者は、何らかの方法で織姫の個人情報を知り、犯人がエステティック会社の社長だと知り、黙ってやるから金を出せと要求をしたので殺された。というシナリオはどうですか？」

美智子は万遍の笑顔になる。

「刑事さん。それ最高のシナリオです。題名は、推理小説「私が愛した彦星」これでいいですか？」

箕浦は、拳から親指を立ててGOODと美智子に伝える。

運転席では、小川がさよならの意味で手を振っている。

美智子が手を振ると、白いセダンはエンジン音をあげて走り去った。

美智子は玄関前で立ち止まって、また夜空を見上げる。

「明日は七夕か。晴れるといいな」

そついうと家の中へ入って行った。

終

## あとがき

「小説家の沼川海湖です」私が愛した彦星編を読んで頂き有難うございます。

3万字以内の推理小説は、いかがでしたでしょうか？

実は、雪鈴は本物の刑事さんに会ってお話をした事があります。

なぜなら、雪鈴は、重傷者が出た事故の目撃者の一人だったからです。

あまり詳しくは申し上げられないのですが、交通事故ではなかったのか、それが本当に事故だったのか、犯行によるものだったのか、警察はそれを断定するために目撃者全員に事情聴取を行いました。

最初、重傷者を迎えに来た救急車が事故の現状を知り、救急隊員によって目撃者は全員帰らないように引き止められました。

その後すぐに、刑事さんが乗った車が、サイレン無しで到着してその事故現場で、雪鈴はその時に立っていた場所に立つように指示を受け、雪鈴の担当になった刑事さんが雪鈴の身長（雪鈴は小柄です）に合わせて腰を屈めた状態の視線で、雪鈴と同じ角度から事故のあった場所を見て、雪鈴は事情聴取を受けました。

結果「柱の陰になるから、ここから事故現場は見えないね。事故の音だけ聞いたのね。だったら帰っていいよ」と言われ、雪鈴も力ツ井が食べられませんでした（笑）。

事情聴取を受けていた時の雪鈴は、かなり緊張していて、疑われないように必死になって答えていた記憶があります。

今思えば、沼川海湖のようにはしゃぐ事まではしないにしても、物語のコンセプトの収集のために冷静になって本物の刑事さんを観察すればよかった、と後悔しています。

結局、刑事さんが捜査に来た事故は、正真正銘の本当の事故だったので、目撃者は誰一人も拘留される事なく、無事に家に帰れました。

刑事さんの仕事は、事件捜査以外にもいろいろあるんだなど、あの頃の雪鈴は思ったものです。

そんな訳で、今回の小説に雪鈴の経験がどれだけ活かされたかは分かりませんが、推理小説をネット上で書けたのはよい経験だったと思います。

話は変わりますが、この小説は【七夕小説企画『星に願いを』】の参加作品です。

<http://id12.fm-p.jp/62/protan>  
a/

上記のアドレスで、トップページに飛ぶ事ができますので、是非ほかの参加者の作品もお楽しみ下さいませ。

それでは、またお会いできるその日まで。

雪鈴るな

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5801e/>

---

小説家の沼川海湖です

2008年8月29日18時42分発行